

「現代語訳・米欧回覧実記」

2010/01/24

米欧回覧の会・会員

鶴飼直哉

この資料は、「企業 OB ペンクラブ¹」と「日米学生会議²」との交流を通して知った実行委員を対象に「日米学生会議の皆さんに一読を薦める本」として纏めた小文を、広く大学生諸君に読んでもらうよう修正したものである。長文になった。ディスプレイ上での流し読みではなく、印刷して読んで頂きたい。

「現代語訳・米欧回覧実記」の薦め

私は現在、「米欧回覧の会³」の会員である。会員となった経緯は、p6 に添付した「俄か仕込みの久米邦武ファン」を見て頂きたい。「米欧回覧実記」(以下「実記」とする)を一言で言うと、1872 年という時点で世界史をスパッと輪切りにしたもので「維新の男の世界観」を知る上でかけがえのない資料であると思う。

「実記」と言っても大部分の学生諸君には、せいぜい久米邦武のまとめた岩倉使節団(以下「使節団」とする)の記録くらいしか覚えがないだろう。書店で高校生のための歴史参考書を五、六冊調べてみたが、岩倉使節団についての記述は半頁くらいしか割いていない。その上、明治新政府が条約改正の根回しを目的として派遣したにもかかわらず外交交渉に失敗したことだけしか書いてない。だから、若い諸君が知らなくても無理からぬことだと思う。

その上、漢文訓読調で書いた「実記」は難物だ。例えば「加利福尼」は「カリフォルニア」くらいは想像できるだろうが「桑方斯西哥」「市高俄」「密士失比」「新約克」「尼亞吉拉」「哈馬哈」「費拉特費」「薩列明度」「波士敦」をすらすらと「サンフランシスコ」「シカゴ」「ミシシッピ」「ニューヨーク」「ナイアガラ」「オマハ」「フィラデルヒア」「サクラメント」「ボストン」と読める人は皆無だろう⁴。初出にはカタカナでルビがついているものの、難関である。

「実記」(正式な名称は久米邦武編「特命全権大使米欧回覧実記」)は明治 11 年に発行(1878 年)された。部数約 3500 部だそうだから、当時はごく限られた人しか読まれなかったと考えられる。

1975 年に「実記」全五冊の復刻版を宗高書房が出版し、その文庫本が 1980 年に岩波文庫から一冊 800 円で購入可能になってようやく「実記」が広く読まれる土俵ができた。これが「実記」普及にたいへん貢献した。とは言っても漢学者久米邦武の難解な文章を、五冊 2200 頁を読みこなすには並外れた忍耐が必要になる。

学生の皆さんには水沢周⁵訳「現代語訳・特命全権大使米欧回覧実記・普及版」(慶応義塾大学出版会)を一度手にとってみることをお薦めする。発売当初の 2005 年には、全 5 冊のセットが 24,000 円で高価であったが、2007 年に普及版が一冊 1850 円のバラ売りで出たことにより、一気に普及の可能性が広

¹ <http://www.obpen.com/>

² <http://www.jasc-japan.com/>

³ <http://www.iwakura-mission.gr.jp/> 泉三郎氏が 1996 年「米欧回覧の会」創立、同会代表。会員約 200 人。泉氏の著書は 5 頁の脚注 13 を参照されたい。

⁴ **人名の面白いものの数例**：閻龍(コロンブス) 226、華盛頓(ワシントン) 205、彼得(ピョートル) 70、拿破侖(ナポレオン) 33、顕理(ヘンリー) 47、惹迷斯(ジェームス) 2、馬利(メリー) 8、以利沙伯(エリザベス) 37
訪問した国名の例など：米利堅(アメリカ)、英吉利(イギリス)、仏朗西(フランス)、白耳義(ベルギー)、荷蘭陀(オランダ)、普魯士(プロセン)、露西亜(ロシア)、日耳曼(ゼルマン)、嚙馬(デンマーク)、瑞典(スエーデン)、以太利(イタリア)、奧地利(オーストリー)、瑞士(スイス)、西班牙(スペイン)、葡萄牙(ポルトガル)、埃及(エジプト)

⁵ 水沢周：元米欧回覧の会・会員。独力で現代語訳を完成させた直後に病に倒れ、2008 年に他界された。現代語訳に訳者注として書かれた膨大な解説で明らかなように、「実記」研究の第一人者の一人。

まった。易しい現代語であるため、久米邦武の格調高い文章に触れることは出来ないが、膨大な記録を読むためには読みやすいことが一番だろう。

英語の方が得意という学生諸君には、英文版がある。2002年 The Japan Documents 発行の Martin Collcutt 訳 “The Iwakura Embassy 1871-1873: A True Account of the Ambassador Extraordinary & Plenipotentiary’s Journey of Observation Through the United States of America and Europe” という長いタイトルの全5編の完訳本である。セットで15万円の高価な本であるが、多分大学の図書室で閲覧できるはずだ。更にこれを500頁にまとめた英文のダイジェスト版が “JAPAN・RISING /The Iwakura Embassy to the USA and Europe”として3000円で Cambridge University Press から出版されており、「実記」の普及という観点では英文版が日本の岩波版よりも先行した感がある。

以上に紹介した四つの「実記」の感じを掴むために、一行がベネチアでゴンドラに乗った場面を久米邦武が恍惚感一杯に書いている部分を例として比べてみる。

(1) 明治11年版(国会図書館)(四)387-388

此日八驛舎ヨリ直二艇ニ上ル、艇ノ製作奇異ナリ、舳首鷲起シ、艇底圓轉トシテ、舳ニ屋根アリ、中ニ茵席ヲ安ンス、棹ヲ打テ泛泛トシテ往返ス、身ヲ清明上河ノ圖中ニオクカ如シ、市塵鱗鱗トシテ水ニ鑑ミ、空氣清ク、日光爽カニ、嵐翠水ヲ籠メテ、晴波淪紋ヲ皺ム、艇八雲靄杏紗ノ中ヲユク、瓢瓢乎トシテ登仙スルカ如シ、

(2) 岩波版 346

此日八驛舎ヨリ直二艇ニ上ル、艇ノ製作奇異ナリ、舳首鷲起シ、艇底円轉トシテ、舳ニ屋根アリ、中ニ茵席ヲ安ンス、棹ヲ打テ泛泛トシテ往返ス、身ヲ清明上河ノ圖中ニオクカ如シ、市塵鱗鱗トシテ水ニ鑑ミ、空氣清ク、日光爽カニ、嵐翠水ヲ籠メテ、晴波淪紋ヲ皺ム、艇八雲靄杏紗ノ中ヲユク、瓢瓢乎トシテ登仙スルカ如シ、

(3) 現代語訳版④394

この日は、鉄道の駅からすぐに小舟に乗ったが、その舟の形が変わっていた。艦も舳も反り返り、船底は丸く、舳の近くに屋根があってその中にクッションを備えた安楽な席が設けてある。棹をさしてゆらゆらと進んで行く。まるで川遊びの美しい絵巻の中の人物になったような気持ちである。鱗のように重なり合った葦の波が水に映じ、空気は澄んでいて日光は爽やかに、涼風が水面を吹き渡って、海面にきらきらちりめんのような細かいさざなみを作っている。ゴンドラはふんわりと霞んだような中を進む。瓢々と風に舞い、天に登って行くかとも思われる。

(4) 英文版 “Japan Rising” JR p410

On this day, we immediately boarded a gondola after emerging from the station. The construction of the boat is very curious. The stern and the prow are curved upwards and the keel is rounded. The stern area has a roof and is fitted with comfortable cushioned seats, and the boat is propelled with a gentle, floating motion by a pole being pushed. It felt as if we had placed ourselves in a picture of a pellucid river. The houses and shops jostling together were reflected in the water, the air was clean, the sunlight pleasant and the water, suffused with an azure tint, was marked by gentle ripples. The boat glided through the dim and misty air, and it felt as if one was being wafted into the sky.

本資料では、四種類の頁表記は (四)387-388、 346、 ④394、 JR p410 などとして区別する。

「実記」を読む面白さ(100人100様の読み方)

米欧回覧の会には「実記を読む会」「英文実記を読む会」「歴史部会」などの勉強会があり、私は「実記を読む会」のメンバーである。月に一度の例会で、割り当てられた会員が原則として一巻ずつ当番となって読む。100巻を通読するには三年以上かかるが、担当した会員がそれぞれ独自の目線と切り口で解説する。ヨーロッパの歴史を復習する人、比較文明論的見地から切り込む人、明治維新のに於ける使節団の評価に詳しい人、ヨーロッパ各地で撮った写真を中心に使節団の足跡を解説する人、林業が専門で毎回素晴らしい論文を「読む会」で発表して下さる人、さらにフルベツキ⁶の生涯を執拗に追求する人、など多彩である。

私の興味の対象は、弱冠 33 歳の久米邦武が「実記」を纏めた過程である。そのための手段として、国会図書館の明治 11 年版をデジタル化する「デジタル実記」を作る壮大なプロジェクトにとりかかっている。余暇の海外旅行には必ず岩波版をガイドブックにして「久米邦武追っかけの旅」をする。これまでに、ヴェネチア⁷、セメリング鉄道⁸とウイーン、サンフランシスコとシリコンバレー⁹、スイス、スコットランドのハイランド地方¹⁰の旅を楽しんだ。

もう一つ私が追求している点は「実記」に現れる各地の経度と緯度との表示がある。文字通り重箱の隅をつつくような問題であるが、「実記」の生成過程を調べる鍵の一つになると思っている。

外出の際、私は岩波文庫版を一冊ポケットに入れてゆく。5冊の中でどれでもよい。電車の中で適当に開いた部分を読む。どこを読んでも、何回か読んだあとでも面白い。

研究者たちの研究対象も多彩である。一例として田中彰¹¹・高田誠二¹²編『『米欧回覧実記』の学際的研究』(1993年)の目次を拾ってみると明らかだ。

アメリカ西部の「岩倉使節団」
大英博物館を見たふたつの東洋
岩倉使節団のイギリスにおける岩塩鉱見学
岩倉使節団とベルギー、ロシア、デンマーク
ペテスブルグの岩倉使節団関係新聞記事
「米欧回覧実記」と日本酒造業
「米欧回覧実記」に現れる度量衡
「米欧回覧実記」における動物園見学記録と動物観
岩倉使節団と西洋技術
明治維新における泰西農業の導入問題
岩倉使節団における宗教問題
留学生と岩倉使節団

このように「実記」は 100 人 100 様の読み方がある。いくら私が面白いと言っても、面白さとは受け取り手本人の問題であり人から押しつけられるものではない。だから、今ここでこれ以上、説明する

⁶ フルベツキ(Guido Verbeck)：オランダ生まれの宣教師。その“Brief Sketch”が「実記」の指南役となる。

⁷ 345～357、④389～407、JR p 409～412

このレポートの最後に「久米邦武追っかけの旅・ベネチアの巻」を添付した。

これは「企業OBペンクラブ」の「何でも書こう会」に出した資料。この会ではA4一枚に縦書きで800字以内に書いた文を参加者が持ち寄り、全員の前で披露する。文書作りに非常に良い勉強になる。

⁸ 381～383、④433～437、JR p 414～415

⁹ 75～102、①65～103、JR p 14～27

¹⁰ 227～251、②258～288、JR p 166～173

¹¹ 田中彰：北海道大学名誉教授。岩波版の校注が詳しい。他に「岩倉使節団」(1979年講談社)、『脱亜』の明治維新・岩倉使節団を追う旅から」(1984年NHKブックス)、その他関連著書、研究論文多数。

¹² 高田誠二：北海道大学名誉教授、久米美術館理事。「久米邦武」(2007年ミネルヴァ書房)、「維新の科学精神・『米欧回覧実記』の見た産業技術」(1995年朝日新書)など科学史的研究論文や著書多数。

必要はない。

学生諸君の中で関心ある人は、まず

「現代語訳・特命全権大使米欧回覧実記・普及版」 第一巻「アメリカ編」¥1850
を手にとって頂きたい。できれば次の二冊も参考用に入手することを薦める。

「特命全権大使米欧回覧実記」(一) 岩波文庫(青-411) ¥840

「現代語訳・特命全権大使米欧回覧実記・普及版」 総索引 ¥500

必ず若い学生諸君ならではの刺激になるはずだ。その上で、皆さんの新鮮な感覚での印象をぜひともNPO「米欧回覧の会」に寄せて頂きたい。

いろいろ調べてみると、久米邦武の大作はほとんど知られていない。肝心なことは、もっと若い人たちに知って貰うことだと思う。残念ながら現在「実記」に関心を持つ人の高齢化が進んでいる。平均年齢が多分60歳代の後半と考えられる「米欧回覧の会」も読み方がパターン化しマンネリに陥る危険性がある。皆さんの賛同を期待する本音がここにある。

「実記」を読むと、明治維新の激しい変化の時代に活躍した30歳代の若者の「維新の男の世界観」のなかに、IT時代の変化に対応する現代社会と共通するヒントを読み取ることができるはずだ。21世紀を支える若者たちに一読を薦める理由である。

いくつかの補足説明

(1) 岩倉使節団

泉三郎¹³「岩倉使節団という冒険」(2004年文春新書)

明治四年暮、廃藩置県という大変革を強行してからわずか四ヶ月後、明治新政府の事実上の首班である右大臣岩倉具視(47歳)が率いる使節団が欧米諸国を目指して出発した。従うは大久保利通(39歳)、木戸孝允(39歳)、伊藤博文(31歳)ら錚々たるメンバー。国の内外に難問が山積するこの時期に、なぜこのような大視察旅行が企てられたのか。岩倉たちは異国の地でどんな体験をしたのか。そしてこの視察団は近代日本に何をもたらしたのか。(表紙扉書きを引用)

(2) 米欧回覧実記

構成は全5編(各編が一冊ずつ、合計五冊)

第一編	北亜米利加州合衆国ノ部(全20巻)	アメリカ編
第二編	英吉利国ノ部(全20巻)	イギリス編
第三編	欧羅巴大州列国ノ部上(全20巻)	ヨーロッパ大陸編(上)
第四編	欧羅巴大州列国ノ部中(全22巻)	ヨーロッパ大陸編(中)
第五編	欧羅巴大州列国ノ部下、及ビ帰港日程(全18巻)	ヨーロッパ大陸編(下)符・帰港日記

なお、明治11年版の「編」「巻」は現代語訳版では「巻」「章」に、英文版は“Volume”“Chapter”。

(3) 実記研究史(田中彰・高田誠二編『『米欧回覧実記』の学際的研究』(1993年)より)

戦前から1960年まで、条約改正問題に伴う外交史的研究が主。

1960年から1975年には「思想史」ないし比較文化史的研究の登場がこの期間の特徴。

1975年以降は岩波版が出版されたことにより、研究者数が飛躍的に増大した。(pp3~11)

全部で2200頁の「実記」の内容は、政治・社会・経済・産業・軍事・教育・宗教・文化・思想などあらゆる

¹³ 泉三郎；岩倉使節団に関する著書多数。「誇り高き日本人・国の命運を背負った岩倉使節団の物語」(2008年PHP)は氏のこれまでの研究成果の集大成ともいべき力作。

『米欧回覧』百二十年の旅・岩倉使節団の足跡を追って(1993年)は泉氏が実地で体験した一人旅の記録。使節団の全貌を手短かに知るには、私が読んだ中では「岩倉使節団という冒険」(文春新書¥700)がよいと思う。

分野にわたる「一種のエンサイクロペディア」というべきものであり、(中略)同時に多くの図版入りの旅行記でもあり、さらに文明の洞察・批判の書でもあった。だから、時代の潮流とともに、それぞれの人びとがみずからの興味に従ってこの文献を読むようになった。

歴史から忘れられた「米欧回覧実記」

これだけ興味深い「実記」だが、なぜか一般には知られていない。

高校の教科書に出ていないことは前記のとおりだが、手元にある中央公論社「日本の歴史」(1966年、全26巻12,000頁)には使節団に関しては詳しく書いてあるものの、久米邦武の事も「実記」も一言も触れていない。これは岩波版の出版以前だからやむを得ないとしても、小学館の「日本の歴史」(1989年、全15巻約5000頁)の中を見てみると、わずか1頁だけ「実記」を紹介しているに過ぎない。どうも歴史書の著者たちの中には「実記」を通読した人はいないのではなかろうか。

なぜこの大作が広く知られていないのか? いくつかの要素が浮かんでくる。

- (1) 岩倉使節団が、諸国との不平等条約改正の下交渉という外交上の任務に失敗し、さらに一行の所持金をだまし取られる失態があった。そのため当初の予定(10ヶ月半)を大幅に上回った一年半(632日)に及ぶ大名旅行が庶民から支持されなかった。
- (2) もう一つは晩年の久米の起こした「久米事件¹⁴」(大久保利謙¹⁵編「久米邦武の研究」や高田誠二著「久米邦武」を参照)の結果、久米の思想的背景が明治大正時代に問題となったこと。当然、これは戦時中に引き継がれていた。
- (3) 現代、岩倉具視のイメージが良くない。2008年のNHK大河ドラマ「篤姫」で描かれた岩倉は下級公家出身のいやらしい成り上がり者でしかない。

永井路子著「岩倉具視」(2008年文芸春秋社は「お気の毒ながら、無意味愚拳といわざるを得ないのが、具視たちのアメリカ、ヨーロッパへの出張だ」と切って捨てている。

「実記」は一般に岩倉使節団の公式記録文書であると誤解されている。しかし「実記」には外交交渉について、一言も触れてはおらず、久米邦武自身の見聞記録(これには学者や専門家の間でもいろいろな議論がある¹⁶ようだが)であると思う。残念ながら、「実記」は「岩倉」の冠にいまだに悩まされているようだ。

私の知る限りでは、NHKが「実記」の全体像を紹介したのは1990年1月から三カ月にわたり東大名誉教授芳賀徹¹⁷氏が担当されたNHK市民大学講座「岩倉使節団の西洋見聞」だけしかない。「実記」を知っている人や久米邦武のファンを増やせば、そのうちマスコミが大河ドラマ並に取り上げる価値を認識する日が来るはずだ。

以下、添付資料

- (1) 「俄か作りの久米邦武ファン」
(2008年3月「米欧回覧の会」・会報第50号投稿原稿
<http://www.obpen.com/modules/smartsection/item.php?itemid=656>
- (2) 「久米邦武追っかけの旅・ベネチアの巻」
(2005年2月「企業OBペンクラブ・何でも書こう会」原稿)

¹⁴ 「新道は祭天の古俗」(1882年)と題した久米論文が問題となり、久米が帝国大学教授の地位を失った事件。詳しくは鹿野政直「日本近代思想史のなかの久米事件」(大久保利謙編「久米邦武の研究」pp201~316)参照。

¹⁵ 大久保利謙(故人): 大久保利通の孫。名古屋大学教授、立教大学教授などを歴任。

¹⁶ 例えば、田中彰「脱亜の明治維新」(NHKブックスp9.7~12)など。

¹⁷ 芳賀徹: 日本の比較文学者。東京大学名誉教授、京都造形芸術大学名誉学長、岡崎市美術博物館館長

俄か仕込みの久米邦武ファン

鶴岡真哉

最近、米欧回覧実記にとりつかれている。

きっかけは三年ほど前に、企業OBペンクラブの例会で泉三郎氏の講演を聞いたことだった。日本史にほとんど興味を持たない私は岩倉使節団の名前だけは聞いた覚えがあったが、それ以上は何の知識も持っていなかった。せつかくの機会だから、予習のつもりで泉さんの「岩倉使節団という冒険」を買い込んだ。

バラバラと頁をめくっていたら、使節団が一八七一年十二月に横浜港をサンフランシスコに向けて船出したと書いてあることから気がついた。富士通で初の海外での開発プロジェクトの現地責任者として私がシリコンバレーに着任したのが一九七一年十二月だから、丁度百年前のことだ。そして一八七八年、久米邦武が実記を完成してから百年たった一九七八年に私は任務を終えて帰国した。そんな他愛のない全く筋違いな発見から、この本を読み始めた。

単なる興味本位であったので、始めのうちは真面目に読んでいたわけではない。それが一転したのは次の文章(66頁)に接したからであった。

『西洋人の素晴らしいところは、刻苦勉励して理学、化学、重学(構造力学)の三字を開き、その原理によつて器械を工夫し利器を發明したことだ(中略)。久米流の表現でいくと、それは「力を省き、力を集め、力を分け、力を均しくする術を用い、その拙劣不敏の才知を媒助し、その利用の功を積みて、今日の富強を一致せり」ということになる』

これは、全盛期のイギリスでニューカッスルの紡績工場を見たあとの、一文字下げ注記を引用されたものである(岩波版第一巻 p255)。アンダーラインの部分に特に衝撃的であった。産業革命の原動力であるメカの本質を見抜いた文章表現だ。三十三歳の漢学者が、一体どうして理工学分野に至るまで、このような洞察力を持ったのだらう。久米邦武とはどんな人物なのか、知りたくなった。

帰宅途中、紀伊国屋書店で「米欧回覧実記」全五冊を買い込んだ。冒頭から驚いた。

『西洋ノ学芸ニ「タリック(理論)」「ト「ブラチーク(実験)」「フ分ツ』(第一巻 p14)とある。拾い読みしてみても感動の連続だ。

アツと言つ間に私は「俄か仕込みの久米邦武ファン」になった。

もう一つの驚きは、訪問先での見聞録だ。ビール工場、鉄鋼所、ガラス工場などあらゆる製造現場での記録の内容と量とは驚異的だ。

僅か二、三時間の間に見るべきものはきちんと見ている。仕事で私は海外の異業種の製造現場を数多く見てきたが、どんなチームを組めばこれに匹敵する報告書を書けるだらう。最新のデジタル機器で完全装備しても、私にはどうしたらよいか見当もつかない。溢れる情報の洪水の中にいる現代では、新鮮な目で観察する能力の点で維新の使命感に燃えた若者の力に遥かに及ばない。

こんな事から一人の久米邦武ファンが「実記を読む会」に仲間入りさせて頂いた。だから、私の実記に関する関心事はその歴史的背景ではなく、久米邦武の人格形成と、二二〇〇頁の実記を作ったプロセスの二点である。

昨年末に高田誠二氏(北大名誉教授、久米美術館理事)が労作「久米邦武」をミネルヴァ書房から発行された。私には絶好のタイミングであった。さっそく入手して正月休みに夢中で読んだ。だが、幸か不幸か私の二つの問題意識には、直接の答は見当たらない。俄か仕込みであった私は、今や完全に虜になっている。

岩波文庫の「米欧回覧実記(四)」を片手に威尼西へ行った。経験十八年の添乗員さん曰く「何ですか、これは変わったガイドブックを持ってくる人は沢山いますが、こんな物で街を歩くお客さんは初めてです。何か漢文みたいですね。羅馬くらないならローマと読めますが、仏羅楼、多加納、米蘭、熱那(注1)、これはお手上げです」「威尼西(注2)がヴェネチアですか、ちょっとメモさせて下さい」「これを見ると、使節団一行も「ロンドラに乗ったんでしょね」

『艇ノ製作奇異ナリ、舳主竊起シ、艇底円転トシテ、舳ニ屋根アリ、中に茵席ヲ安シス、棹ヲ打テ泛泛トシテ往返ス、身ヲ清明上河ノ図中にオクカ如シ、市塵鱗鱗トシテ水ニ鑑ミ、空氣清ク、日光爽ヤカニ、嵐霏水ヲ籠メテ、晴波淪紋ヲ皺ム、艇八雲靄杳渺ノ中ヲユク、飄飄乎トシテ登仙スルカ如シ』

昨年十月の例会で泉二郎氏の講演を聞いてから、私は「米欧回覧実記」に酔っている。一頁をめくる毎に驚きの連続だ。これほど情報がぎっしり詰まった本は見たことがない。

岩倉使節団の足跡を探りながら丸五日間歩き回った。多分百五十年前の姿をそのまま残していることにおいて、このヴェネチアは筆頭だろう。サンマルコ広場、大鐘楼、ドゥカーレ宮など、本に出ている風景そのものだ。謎も残った。一行が泊まった新約克(ニューヨーク)ホテルが誰に訊いても判らない。

こたわって見て回ると面白いことに遭遇する。サンマルコ広場の図(左上)は一体どこから見たのだろう。この字型に囲まれた広場では手前の博物館部分が邪魔になる。調べてみてやると判った。元々教会があったのをナポレオン軍が破壊し、千八百九年に取り壊されている。広場の手前は空き地だった。

鐘楼に登った。『中二傾斜ノ階ヲ施シ、三十七面ニテ鐘下ニ達ス』代わりに、エレベーターで一気になれるのが、唯一の違いだ。『此日快晴ニテ、コノ楼ニ登リテ臨眺セシニ(中略)当府ノ衆島ヲ水波ノ中ニ浮キ出ス、景色甚夕佳ナリ』

(注1) フローレンス トスカーナ ミラノ セノア

(注2) 「威尼西」と「威尼斯」との表記が混在する。

